

人として履み行つべき道、義

「子曰く、君子は義に喩り、小人は利に喩る。」子曰、君子喩於義、小人喩於利。

〈孔子言つ、「君子は、義に敏感でそれを標準として理解するが、小人は利に敏感だ。」と。〉

義という言葉は、論語では十七もの章句を使い説いています。漢語林からその義の意味を調べると、六つの意味を示しています。それを参考に論語における十七章の義の意味を考えると次の三つに収斂できると考えます。

- ① ものごとの処理・対応が道理にかなう適切である。
- ② 人のふみ行つべき道（公正含む）。
- ③ 名誉や利益を離れ、人や社会のために尽くすこと。

私は、この章句の義には、この三つの意味が込められていると考えます。①は、道理にかなう適切であるということは、中庸にも通じる相対的価値でもあり、時や場、位置などを勘案し道理に照らし宜しきにかなう丁度いい判断・行動を自ら選択判断し行うことを意味していると考えます。②は、人の身心を傷つけないなど絶対的価値とも考えます。③は、私利私意のみを考えるのではなく、人や社会に尽くすことで自分も含め三方よしの生き方、考えかたの行動を意味していると考えます。

幕末・ペリーが武装艦隊を率い浦賀に来航するなど内憂外患の時、福山藩校誠之館を開校された老中首座阿部正弘公がそれら国難に敢然と立ち向かわれた姿には、仁から産まれた自然なりの義心があったからではないでしょうか。しかも幕末尾大不悼国政一層の困難を極め、

雄藩を度外において政治はできず、又人々の意見も無視できず事蹟年譜（阿部正弘事蹟：明治四十三年渡邊修二郎著）によれば米国書を「諸有司及比列藩ニ示シテ其意見ヲ問フ」とあるように、それまでなかった意見聴取しながら政策を進めたことは、正弘公の義心あったればこそと考えます。その時、意見書を提出した二人扶持極貧幕士勝麟太郎は、旧習の門閥慣例を破り海防掛目付に登用され、後、江戸無血開城や日本人によるアメリカ往復を初めて成す咸臨丸頭取として活躍することにつながります。又、直接交渉役には、永祿九年（一五六六）から文政八年（一八二五）にいたる対外関係史料を国別・年代順に配列した史料集『通航一覽』（三五〇巻）を編纂していた林復齋を登用し、恫喝的ペリーに事実を以て交渉反論でき日米和親条約に結実させました。事程左様に適材を適所に置いた事例から尚一層の義心に思いが致します。

更に、国、人々のことを思い徳川幕府総裁として人材育成にも義心を發揮されました。事蹟によれば

「正弘一夜老臣召シ謂テ曰ク、國家今日ノ衰態恐悚ノ至リナリ、就イテハ幕府ニ於テモ追々改革新政發スベク、先ヅ吾藩ヨリ先鞭ヲ着ケ・・・因テ先ヅ學制ヲ改革スベ

シ・・・老臣等一同感泣シ、旨ヲ了ス、是ニ於テ學校創營ノ議起リ、尋テ江戸、福山ニ於テ執政中ヨリ各一人ヲ選ビ、文武総裁ヲ命ス」とあります。

このように、全国人材育成の先駆けとしての江戸邸及び福山の誠之館開校だったと考えられます。故に教育の方法は、「考試ノ法アリ、其等位ニ依リ仕進ノ法ヲ定ム」とあり、門閥でなく能力主義を採り入れていきます。また、学校の構造は中央を漢学の講習所とし、別に和学、兵学、算学、書学、洋学、医学、槍劍弓馬及び柔術砲術の練習所を周囲に羅列し採り入れるなど旧来の慣例を廃し、義による不易流行文武両道の改革を進めていったのです。

一方、論語には、次のような章句があります。

「子曰く、之を道くに政を以てし、之

を齊ふるに刑を以てすれば、民免れて恥

づる無し。之を道くに徳を以てし之を齊

ふるに礼を以てすれば、恥づるありて且つ

格る」「為政」「子曰、道之以政、齊之以刑、

民免而無恥。道之以徳、齊之以禮、有恥且格。」

〈孔子言つ、「法律や命令だけの政治で人々を導き規制しようとし、これに従わない時は刑罰を以て臨むなら、人々はその刑罰さえ免れればよいとして悪いことをしても恥ずかしく思わなくなる。が、仁（愛）、義などを身に付け行つ道徳を以て人々を導き、主体性を認めお互い敬い合う礼以て組織経営していくと、人々は悪い事をする事羞恥を感じ、一人一人自ずから善に至り、集団の皆が生きて生活澆滌地として生活し働き幸せになる」と。〉

法令は、社会生活するうえでの最低限の約束事で、それさえ守れば公明正大とはならないと考えます。諸古典では、人間としての情愛や義心に反しても心の底からの反省の色も無い小人が権力を手にするとその組織は衰退滅亡へと向かう、としています。それらとは全く逆の老中首座正弘公の徳・能力は国を救い人々を救う大事業を成されたと考えます。残念にも正弘公は重責を担い行年三九歳の若さで没せられました。それ迄諸事あり、

「小人の過や必ず文る」「子張」

「小人之過也必文」

正弘公の執られた事は、万人に全て受け容れられたわ

けではなく時には老中を廢黜されかけたこともあったようです。が、小人の如く言い訳で誤魔化すのではなく、改める処は改め主張すべきは主張し堂々と立ち向かわれた結果、十四年もの長きにわたり老中の重責を背負いながら務められたんだと考えます。まさに誇るべき中庸の君子だと考えます。その正弘公の志の毫末でも漢学から共に学びたいと切に思います。

皆様のお導きをよろしくお願いいたします。